赤十字国際委員会（ICRC）国際人道法模擬裁判・ロールプレイ大会 2022年大会 報告書

西南学院大学

法学部国際関係法学科
上野大我
齊田花乃
吉川さくら

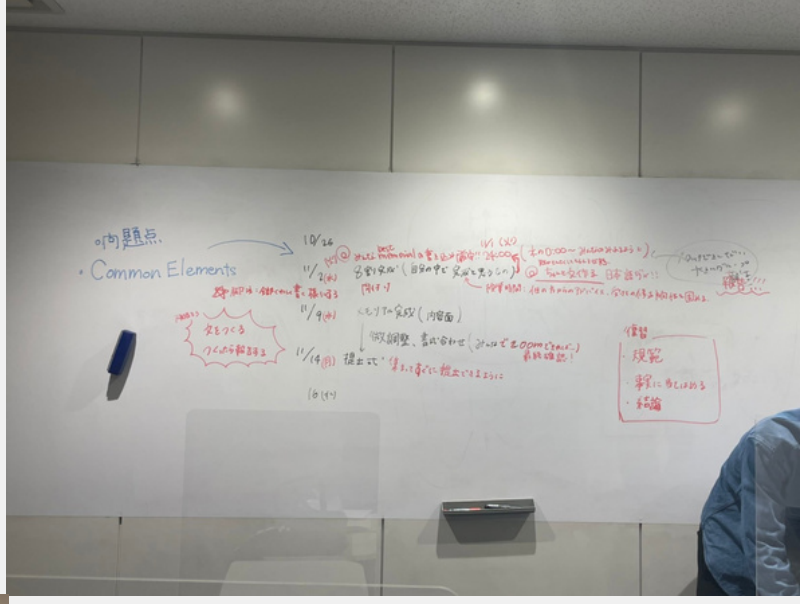
外国語学部外国語学科
吉永真史
入部光

国際の狭間に置かれた
人々に寄り添う
心と知
KARDIANOIA

©Aaron Sheppard

事実文読込み

運営より提示された架空の事実文を読み込みます。作り込まれた複雑な英文から事実を読みとる作業は最初にすべき最も重要な作業です。ここでどれだけ事実を読み込み、理解することができたかで全てが決まると言っても過言ではありません。



書面作成

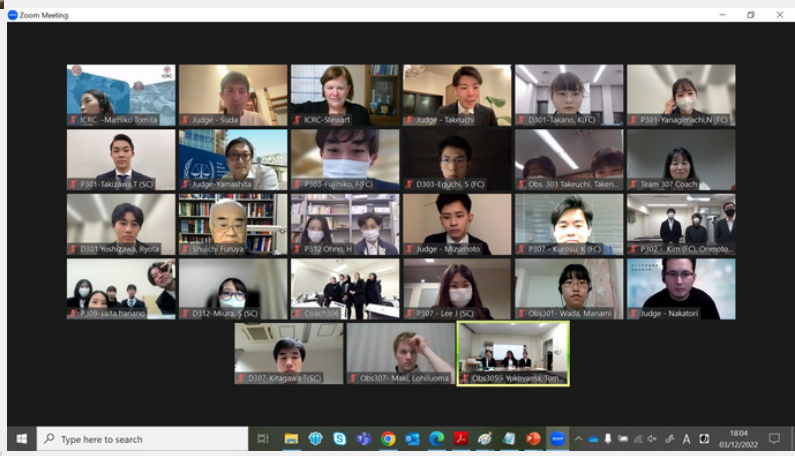
Memorialと呼ばれる書面を作成しました。戦争犯罪を構成する要件が決まっており、それに事実文を当てはめながら、原告・被告、それぞれで論を作ります。論は自分たちの主観ではなく客観的事実を元に作ります。客観的事実として過去の判例や学説を使いました。

弁論練習

作成したMemorialを元に、実際の大会でのやり取りを練習しました。弁論では、自分たちの論の主張に加えて、裁判官からの質問に対応する必要があります。そのため、相手からの質問を想定し、自分たちの論を強める作業をする時間にもなりました。

大会当日（12月3日）

今年の大会も、オンラインによって行われました。他大学の参加学生との触れ合いは大きな刺激となりました。西南学院大学チームもメンバーそれぞれが最大限の力を発揮することができました。



©Aaron Sheppard

〈参加者〉

吉永真史（第1原告代理人）
齊田花乃（第2原告代理人）
上野大我（第1被告代理人）
吉川さくら（第2被告代理人）

第１被告代理人
法学部国際関係法学科
3年　上野大我

　去年ICRC模擬裁判で何もできず屈辱を味わった私は、周りの雰囲気や状況によってメンバーに何か提供できる立場でいようと存在意義を定めて今年のICRC模擬裁判に参加しました。それにより、メンバー間でのコミュニケーションも円滑に進み、新たな問題点などが発見され、チームがいい方向に進んでいることが感じられました。また、今回一番大切なことに気付かされました。それは、独りよがりになっては完璧なものは作れないということ。客観的な意見があってこそ、自分では見えなかった部分が見えてくるし、それを改善すればより良いものが作れるとういうことです。

　また、「自信」を持つには今までの自分の行動が決めてくれることを再度認識しました。今回で言うと、模擬裁判の練習を完璧にすればいいわけではなく、模擬裁判の練習を完璧にするには日頃の生活、授業への姿勢、模擬裁判の授業を主体的に盛り上げることなどが必要で全て何かしら繋がっていると言うこと。裁判時だけにやろうと思っても、その行動を取るための「勇気」がないということ。今回学ばさせていただきました。

これらは就活を控えている自分にとっては、気づけてよかった部分であり、今後すぐにでも改善すべき点です。根岸ゼミでこういう経験ができたことが今の自分にとって自信でもありますし、いい教訓を学べたことになります。と同時に、自分の荒目立ちな部分が浮き出る場面でもあり、それは「不安」に変わっていきます。その「不安」を１日でも早く「自信」に変えられるように、上記のことを意識しながら、日々生活していこうと思います。

第２原告代理人
法学部国際関係法学科
3年　齊田花乃

今回の模擬裁判での自分の最大の課題は英語でした。主張や質問、裁判官への返答など、全て英語でコミュニケーションをとる必要のあるこの大会で力を発揮するために、「相手に伝わる英語」というのを意識してオンライン英会話などを使用して勉強に励みました。その結果、模擬裁判の当日、自分でも驚くほどに裁判官役の人からの質問に英語で答えることができました。オンライン英会話で身につけた英語でのコミュニケーション能力、また、これまで自分のしてきた準備への自信が結果につながったのだと思います。さらに、今回の大会では、原告、被告の正反対の主張でのメモリアルを作成しなければならないというのも難しい課題でした。自分の主観ではなく、判例という根拠を探し、論を強くしていくというのは、簡単なことではありません。ですが、そうやって長い時間をかけて作ったメモリアルは自分達にとって非常に誇らしいものとなり、模擬裁判当日は自分の出せる最大限の力を発揮することができました。

私は今回の体験で、何か自分を変えたい、これまでの努力を出し切りたい、と思うのであれば、とにかく飛び込む、そして、それを克服できるほどの十分な自信を持つことが重要だと学びました。そして、自信をつけるためには、それだけの努力をすることが大切です。私は、国際模擬裁判まで、それだけの努力ができたと胸を張って言えます。だからこそ、大きな達成感を持って終わることができました。

これからもこの模擬裁判で学んだことを忘れずに、どんなことにも全力で挑戦していきたいと思います。

第２被告代理人
法学部国際関係法学科
3年　吉川さくら

約一年前、ICRC模擬裁判大会に出場することを理解した上で加入した根岸ゼミ。その前段階として、前期にModel UN UPRに出場しました。その時に痛感させられたこと、それは「自分の考えを相手に伝えること」の大切さでした。勉強や準備はして、大会に臨んでいるのにただ原稿を読んでいるように感じる、自分の中に学んだことを落とし込めていないなどの指摘を大会後に受けました。

この反省を生かし、後期に行われたICRC模擬裁判大会の準備に取り組みました。今回の大会は、準備の段階から苦戦することが多かったです。しかし、分からないことがあったら、親身に相談に乗ってくれる仲間がいました。大会の中ではみんなで作ったMemorialという書面を元に弁論を行ったため、みんなの思いを背負って弁論を行いました。前期は自分で準備したものを自分で発言する大会だったため、上手くいかなくても所詮は自分だけの問題でした。しかし、今回の大会では、自分の弁論にMemorial を一緒に作成した仲間の何十時間もの思いがこもっていました。その思いもあったからか、前期の大会の反省点であった「相手に伝えようとする気持ち」というものが自然と湧き出てきました。それはきっと、心から相手に自分たちの作り上げた弁論を聞いて欲しかったからだと思います。さらに、何としてでも質問されたことに答えよう、質問されている内容が理解できなくても何か答えられることはないかと考え、自分に臆することなく、質問に対応できたことは前期の大会から成長できた部分でした。

初めはICRC模擬裁判に出場することに不安を感じていましたが、今では同じ志を持った仲間と共にこの大会に出場できたことを誇りに思います。短い大学生活の中で打ち込むことができるものが出来たことは人生の糧になりました。授業時間外もアドバイスをくださった、根岸先生、ゼミの先輩方、4ヶ月間共に頑張ったゼミ生、本当にありがとうございました。

第１原告代理人
外国語学部外国語学科
1年　吉永真史

私はこれまで様々なことに挑戦してきましたが、詰めが甘く、肝心な時に易きに流れることが多かったです。そこで、今回の模擬裁判に臨むうえで私は“自分のやれることはすべてやりきる“ことを目標に活動に取り組みました。しかし、法学の論理や知識の理解は時間がかかり、そのたびにチームのメンバーや先輩、先生にたくさん助けてもらいました。その甲斐あって知識と知識がつながって線となり面となる過程に楽しさを見出し、のめりこむかのように活動することができました。本番に近くなるにつれ自分だけでなくチーム全員が同じ熱量で本気で取り組んだことでチーム内で切磋琢磨しあうことができました。本番では自分とチームのみんなで準備してきたことをいかんなく発揮し当初の目標を達成することができ、自信につながりました。

ただ、チーム内での意思相通を図ることの難しさも感じました。自分はメンバーや先生たちにたくさん助けてもらったにもかかわらず、ほかの人が理解に時間がかかっているときの対応がうまくとれず、特に自分のなかで定着しきっていない知識を伝えることの難しさ、一方で自分のやるべきことも同時にこなす必要があり本当に大変でした。

今回このような経験ができたのは自分が主体的にこの大会に参加希望を出したからであって、何も動かなければおそらくこれまでと何も変わらない平凡な毎日を過ごしていたと思います。機会は自分でつかみ、その中で得られることを必死に模索することを大事に二年生以降も頑張ります。

メンバーをはじめ、先輩方、先生、皆さんのおかげでここまで大きな経験を得ることができました！

本当にありがとうございました！

事実文読込み

本番にどのようなSituationでどのような問題が出てくるか全く予想がつかないため、Melzerの教科書を使って、「ICRCの役割」「女性」「子供」「避難民」などについて毎日勉強していました。

大会当日（12月10日）

大会本番直前に“Children” “Women” etc...
について最後の見直しをしている様子

©Aaron Sheppard

©Aaron Sheppard

ロールプレイ中

このSituationは西南チームは
ICRC職員として、他大学生は
Kissakaの赤十字職員として
Kissaka軍に収容されている子供
の視察に行った時の写真です

〈参加者〉

入部光
上野大我
吉永真史

法学部国際関係法学科
3年　上野大我

　今回大学生になって初めて、対面形式で大会に参加したのはICRC RolePlay大会が初めてでした。やはり、今まで経験してきたオンラインでの模擬裁判や模擬外交と違い、対面ならではの「大会時の場の空気感」や「対戦校から感じる緊張感」が感じられました。その中でも特に戦時中に捕虜として囚われている子供を訪問する場面は役者と相手校の行動に圧倒されるばかりでした。戦時中の子供は1番弱い立場にあり、ICRC職員というロールを与えられた私たちは彼らを保護する必要があります。一度、今ある自分の地位を捨て、戦時中に捕虜として囚われている子供と同じ立場にならないといけない。この KARDIANOIAの理念のように「相手の立場に一度立ち、彼らの痛みを理解した上で援助を行う」「一方的な援助は逆に相手を苦しめるかもしれない」そんな言葉を理解した上で、真に体で感じることができた大会でした。

　今回、英会話の成長もみられ、原則も一通り勉強したつもりでしたが、本大会には通用しませんでした。しかし、本大会に参加して第3者の「自分の立場を捨てて相手に寄り添う能力」を目の当たりにしたのは初めてでした。2年次に「模擬入管」でそういう状況に立ったことがあるのですが、自分がどう感じるかを見つめ直す機会であり、第3者からの視点は見られませんでした。ですから、相手校として、同じロールを全うする仲間として、第3者として、参考にできる良い機会でした。

外国語学部外国語学科
1年　吉永真史

　今回私は、模擬裁判とロールプレイの大会の両方に参加しました。二つの大会に参加しましたが、裁判とロールプレイとでは全く毛色の違うものでした。裁判では、裁判官をはじめ法的な知識を有している人たちで構成され、すでに弁論の環境が整備された中で自分の主張を伝えることができる一方、ロールプレイでは法的な知識を持たないことはもちろん、なにかしら困難を抱えている人たちに対して自分たちから彼らに寄り添い、彼らが心を開いてくれる環境を作り出したうえで自分たちの主張を伝える必要がありました。

　当日のsituationの一つに生と死のはざまにいる人たちとかかわることがありました。相手に誤解を生じさせないためにどの単語を使うべきかを瞬時に考えることができず、自分の英語が現場で使えるものではないことを痛感しました。ただ、そのような緊張感に満ちた場面でも自分から主体的に発言したことは私にとって大きな学びとなりました。なぜなら、伝える姿勢や情熱から生まれる信頼を実感できたからです。今後は自分の考えを伝えることはもちろん、話す内容やTPOに即した言葉選びを日常生活から大事にします。

　また、今回の大会を通じて友達もできました。今回の大会は対面で開催されたため、彼らと同じ空間で同じ雰囲気の中協力して取り組むこともありました。各場面で彼らの実力に圧倒されることも多く刺激を受けました。大会は然り大会後の会食など、平場での会話や行動でも彼らから学ぶことが多かったです。決して今の自分に満足せず、常に高みを目指す彼らとの出会いに感謝しています。自分も負けずに頑張ります！

外国語学部外国語学科
1年　入部光

　私は、ロールプレイの参加を通して、自分の考えを相手に伝えるということの大切さを改めて学ぶことができました。
　私は高校2年次に参加した全日本模擬国連大会で、同じ高校生の話し合いに入っていけず、当日は用意していたスピーチ以外、何も発言できなかったという経験があります。ただただ頷いて相手の意見に賛同していた時、自分自身の考えや軸を持たなければ、何もできないということを痛感しました。
　今回のロールプレイ大会では、その学びを活かし、自分の考えを持ってチームの中で発言することを目標にしていました。しかし、ゼミに参加した当初は、国際法なんて自分の専門外であると自分の中で線引きをしてしまっていたり、考えも持てなかったり、自分の発言が合っているかどうか分からなかったりとなかなか上手くいきませんでした。そんな時、チームメイトが分からないところを何度も質問したり、良いと思うことを提案したりしている姿を見て、答えは1人で出すものではないこと、断片的で不完全でもいいから考えていることを出し合って全員で答えに近づけていくんだということに気づきました。
　大会当日は、場面の緊張感や対戦校のすごさに圧倒された部分もありましたが、自分から発言をしたり、チームメイトに繋いだりしながら、対戦校のチームとも協力して取り組むことができました。
　この大会に参加できたこと、ここで得た学びは自分の中に一生残っていくものだと強く感じました。参加することができて本当に良かったです。これからも、自分の分野や自分自身の枠を超えて色々なことに挑戦していきたいです。

法学部国際関係法学科
准教授　根岸陽太

今年度の大会には、法学部３年生３名に加えて、外国語学部1年生2名が果敢に参加してくれました。模擬裁判・ロールプレイはもちろん、国際人道法も初めて触れる内容で、インプットに苦労したことと思います。さらに、模擬裁判ではリサーチを進めて書面を作成したうえで弁論することが求められ、ロールプレイでは様々な場面を想定して役回りを演じる必要があります。そのような困難にもかかわらず、全員がチームメンバーを信じて、それぞれがベストを尽くしてくれたと感じています。自分たちの置かれた現状や課題を分析し、同じゴールに向かって走り抜く経験は、それぞれが進む次のステージできっと役に立つはずです。

国際の狭間に置かれた
人々に寄り添う
心と知
KARDIANOIA

国際人道法模擬裁判・ロールプレイ大会への参加は国際法学習プロジェクトKARDIANOIAの一環として実施しています。

プロジェクト詳細は下記HPに記載しています。
随時参加メンバーを募集しております。
https://www.seinan-kardianoia.com/

本プロジェクトの第一義的な目的は、「国際の狭間に置かれた人々に寄り添う」ことのできる【心（KARDIA)】を備えた人間に成長することです。国際法学習では、助けが必要な人を「救う」側の活動に焦点が当てられることが多いですが、そもそも「救われる」側がどのような痛みを味わっているかという倫理的な感覚がなければ本当の意味での救いにはなりえません。そこで、本プロジェクトに参加する学生には、まず何よりも「寄り添う」という倫理を基本に据えて勉学に励んでもらいます。

他方で、剥き出しの生の現場に置かれた人々に「寄り添う」ためには、心を尽くすだけでは不十分で、それを現実にするための知恵が必要になります。本プロジェクトは、入管・外交・戦争・裁判といった様々な場面を模擬的に体験することで、実践的に【知（DIANOIA)】を獲得することができます。これらの模擬的な取組では、それぞれ国際難民法・国際人権法・国際人道法・国際刑事法といった人間に焦点を当てた国際法の分野を対象とすることから、理論的な学問体系も念頭に置いて勉強を進めることができます。

この理念に共鳴する学生は、学部を問わず勇気を持って本プロジェクトの門を叩いてください。仲間と一緒に心と知を成長させましょう。

CERTIFICATE OF PARTICIPATION
CERTIFICATE OF PARTICIPATION
CERTIFICATE OF PARTICIPATION

Dec 3
309 Team Seran

国際の狭間に置かれた
人々に寄り添う
心と知
KARDIANOIA